論壇

聴く者を励まし勇気づける
感動のベートーベン音楽祭

田幸　正邦

四月二十九―五月一日に、東京国際フォーラムで「ベートーベン音楽祭」（一月三十一日付の本紙で紹介）が開催された。五つの会場で、三日間に延べ百八公演が催され、出演した音楽家は約千人で、うち四百人が外国人であった。私たちは連日、朝十時から夜の十一時まで、ベートーベンのあらゆるジャンルの音楽の奏でる中で過ごした。参加者は三日間で約三十万人に上り、まさしく前代未聞の祭りであった。ここで、音楽祭で特に印象に残った演奏を紹介したい。

この音楽祭の大きな柱は、何といっても、交響曲九番「合唱」（井上道義指揮、フランス国立ロワール管弦楽団）であった。この演奏は三晩行われたが、私は初日の夜に聴いた。深い弦の響きが聴く者の心を激しく揺さぶり、特に第三楽章の解釈は大きな感動を与えた。

アンヌ・ケフェレックは、ピアノ協奏曲第四番（矢崎彦太郎指揮、トウキョウモーツァルトプレーヤーズ）を弾いた。彼女は、蜂蜜の香りを漂わせるこの曲の特異性を際立たせた。この協奏曲には、ベートーベンの恋心が最も高い密度で濃縮されている。

今回、大きな期待を持って臨んだのがピアノソナタ集（三十二曲）であった。多くの演奏の中で、小山実稚恵のソナタ第三十二番は、特筆に値する。私はジャズの起源は、このソナタの第二（最終）楽章にあると考えている。彼女の最終楽章の第三変奏は、まさしくジャズであった。

日本人に、園田高弘氏（故人）に次ぐベートーベン弾きが誕生したといってよい。彼女には、ベートーベンの思いや姿が見えるのであろう。そして、彼女はすでに、ベートーベン奏法とそのスタイルを確立している。

バイオリン協奏曲は、前述の「合唱」とピアノソナタ集に次ぐ柱であった。その中で、庄司紗矢香と諏訪内晶子の演奏が見事であった。この曲は女性によって、本来この曲の持つ特性を発揮できることが分かった。なぜならベートーベンはバイオリンの音に、恋人の肉声を描写しているからである。特に、後者の音は「ヨゼフィーネ」のそれであった！

この音楽祭に参加して、ベートーベンの音楽を愛する人々が極めて大勢いることが分かった。赤子を抱きながら聞き入る若い夫婦、恋人同士、幼児から小中高生、大学生、そして三十代から、何と杖をつきながらの八十代や、肢体不自由の方々の顔を見ながらの感動の三日間であった。特に幼児や小学生が、ベートーベンの後期のピアノソナタ（三十―三十二番）を、輝かせた目をまばたきもせず熱心に聞き入る姿を目の当たりにして驚いた。

ベートーベンの心臓の鼓動が、私たちの心の中だけでなく、あらゆる自然や生活環境の中で脈々と打ち続けていることを実感した音楽祭であった。彼の音楽は、聴く者の心を激しく揺さぶり、励まし、勇気づけ、生きる希望と力を与える。ベートーベンはすごい！

ところで、今年は沖縄県でもベートーベンの連続演奏会（ピアノソナタ）が七月二十四日にスタートする。それを楽しみにすると同時に、育みたいものである。

（琉大農学部教授、沖縄ベートーヴェン協会）